

「しっ！ ぜったい音をだすなよ。静かに、静かに、そおっとだぞ。」そう言うと彼は足音を忍ばせてドアに近寄った。

□

僕はパリに向う機内にいた。仕事だった。そして いつもそうであるように、その時もバックの中にある小さなドキュメントケースの中のを改めていた。

パスポート、フランの入った財布、フランスにいる友人や知人の連絡先を書いた小さなアドレス帳、そんなものが入っている。フランスに行くときはいつもその小さなケースを、鞆が替わってもそのまま持っていくのが習慣だった。そしてそのドキュメントケースの底に、いつものように一本の鍵があることを確認すると、僕はいまでは珍しくなった少し大きな真鍮の、その古めかしいくすんだ黄色い金属を手に取り、それが少し重く感じられると、頭上の小さなスポットライトを浴びて鈍く光るのを見ていた。

遠い過去が思い出された。

□

その年の秋、僕はパリの”住处”を探しながら歩き回っていた。黄色く染まった街の色もそろそろ終わりに近づいていた頃だった。

部屋はなかなか見つからなかった。

十月も半ばに近づくとほとんどの手ごろな部屋はすでに誰かの手にあり、もちろん学生寮などは論外で、大学の掲示板や知人のつてをたよる他なかった。不動産屋を通してそれなりのアパートを見つけることは可能ではあったけれど、そんな懐の余裕はなかった。

焦っていた。パリに出てくると、僕はとりあえず、僕よりも数ヶ月早くTOURSからパリに来ていた友人のモントルイユの狭いアパートに身を寄せてもらいながら、自分の部屋を探し始めていた。

そして同時に大学の事務からもらった教官の専攻分野を記したリストを元に、指導教官も決めなければならなかった。何人かの教授とアポをとり、面接をしてお互いの理解が得られた指導教授が決まったのはやっとほんの数日前のことだった。

しかし部屋は依然見つからない。 疲れていた。

□

その日はくすんだ灰色の雲がパリの空を覆っていた。

居候先の友人のアパートに帰ると、その手紙が僕を待っていた。
父からのものだった。

《父の経営する小さな貿易会社が倒産した。家も手放さなければならない。今帰ってきてもおまえのいるところはない。おまえはそっちで一人で生きて行け。下の兄弟たちのことは心配するな。おまえはおまえの自分のことだけを考えて生きていけ。》

そんな内容だった。何度もその手紙を読み返した。しばらく何も言葉が出てこなかった。そしてはっと気づくとすぐに帰国しなければと思った。それはあまりに当然のことであるし、必然のことだと思えた。

そしてすぐに父に連絡した。電話はまだつながっていた。
しかし電話の向こうで言う父の言葉は手紙の内容と同じことをくりかえしていた。

『どうしようか。』 僕は迷った。
自分の道は自分で切り開いて勝手に前に進め、そのことが真に親孝行なのだとその時父は言ってるような気がした。

僕はこのパリに残ることを決心した。そして下の三人の兄弟に自分の気持ちを手紙に書いて伝えた。

けれど僕の心の奥底には何かが引っかかったままのようで、それは晴れることはなく、しばらくの間霧に閉ざされいた。

□

果して僕はパリの”住処”を探しながら、心の”住処”も探し始めていた。
こうして毎日パリを歩きながら、パリにいることの意味を考えずにはいられなかった。
そして住む部屋が見つからないように、僕は心の居場所を見失いかけていた。

『これでいいのか。』『こんなことをしていいのか。』そんな自分への問いかけに煩悶していた。

落ち葉が舞い始めたパリの晩秋の中で僕は確実に指標を逸していた。

□

どうにもこうにもならない、そんな時、一人のフランス人の顔が浮かんだ。

彼の名はクロードといった。

クロードとはTOURSにいた時友人の日本人女性のアパートで初めて会った。

友達の友達を訪ねてふらっと遊びに来た、そんな感じだった。

本当は組合か何かの会合がTOURSであったらしい。

その時、「パリに来ることがあれば寄ってくれよ。」と言って僕に住所をくれた。

ただそれだけの短い出会いだった。

『だめもとで会って見るか。』

モンパルナスから二つ目のメトロを出ると、そこはまだ昔ながらのパリの面影を色濃く残す下町の風情があった。

小さな路地に入った。車もすれ違えないような細い道だった。番地をみながら数十メートル進むとめざす住所には煉瓦色のくぐり戸が面していて、その奥には小さな中庭があった。そして左側の四階建ての古めかしい建物のその一階に、彼の名前をみつけた。

「あのう、さっき電話した***ですけど。」 そういいながら扉をノックした。

「やあ、よく来たね。さっき電話もらった時はよく思い出せなかったけれど、顔を見たら思い出したよ。」 と言い、僕を部屋に通した。

小さなキッチンと二つの部屋、そして奥にはリビングがあった。決して広くはなく新しくもないけれど温かみのあるアパートだった。

「さっきも電話で話したように、今住むところを探しているんです。パリの大学に来ることが決まったのが遅かったもんだから、なかなか見つからなくて、それでもしかして、どこか心当たりとかないかと思って。」

そんなことを言いながら僕はパリに来たいきさつや部屋探しに苦慮していることを話した。

「そうか。」 彼はそう言いしばらく僕をじっとみつめていた。

「う～ん。そうか。わかった。」 ともう一度同じ言葉を繰り返した。

「.....」

そして一呼吸おくとこう言った。

「今そこの部屋にカメラマンの友達がカップルでいるんだ。そいつらが来週ここを出て行くことになってね。」 そういいながら玄関に近い一室に目を向けて話を続けた。

「つまりその部屋が空くって言うわけなんだ。ここは僕が借りているんだけど、今はそのカメラマンの友達が家賃の半分を負担してくれていてね。それが出て行くってことになったから、これからどうしようかと思っていたところなんだ。もしよかったらその部屋、使わないかい？ どうだろう。」

いい話だった。彼が借りているアパートだから面倒な手続きもいらない。そして彼が言った月々のものも僕が払えない金額ではなかった。こんな条件のところはもう決まってるだろう。僕はこの思いもかけない幸運に嬉しさが込み上げてきた。

「ほんとにいいの？ よかったあ。やっと住むところが見つかった。ほんとだね？
ありがとう。ほんとにありがとう。」

彼はめがねの奥のやさしい目を細めながら
「そう。来ればいい。」と言った。

□

僕はこの街が気に入っていた。
若者も年寄りも、道で出会うと誰もが「やあ。」と挨拶する。
パン屋、肉屋、八百屋、カフェ、それぞれの商店は日常の息遣いの中でしっかりと”自分”の顔をさらしていた。

近くには”倉庫”と言う名の映画館もあった。一階は映画やアートの本屋にもなっていてコーヒーも飲めたし食事も出来た。ここに来て間もない頃、この”倉庫”の回数券をクロードがくれた。

こうしてこの街はほんのわずかの間に僕の”街”になっていった。

その年、冬の訪れは早かった。
僕は冬のパリが好きだった。街は、厳寒の中にその本質をあらわにし、ここもその例外ではなく、その場に”いる”ことの喜びを与えてくれていた。

□

クロードは働きながら学んでいた。専攻は組織社会学だった。
その風貌はやさしく理知的ではあったけれど、ときおり茶目っ気をもみせる。

彼のアパートのリビングには古いレコードが山積みになっていて、よくみるとそのレーベルには彼の苗字が冠してあった。聞けば彼の父が創設したレコード会社だった。しかしそのレコード会社は潰れてもうなかった。

週末になると彼の友人たちがよく訪れてきた。技術屋、医者、カメラマン、元オペラ歌手、教師、その面子はさまざまだった。

僕たちはいつも大きな圧力鍋で、牛肉を赤ワインで、ときには豚肉の塊とオレンジを一緒に煮込んだりして、大人数でも簡単にココットひとつで作れるものでよくテーブルを囲んだ。クロードはキッチンでそれを味見するときスプーンでひとさじすくうと、口をピチャピチャさせながら「う～ん。悪くない。」ときまって呟く。

夕食の後はいつも皆で大きな声で話したり笑ったりして大騒ぎだった。元オペラ歌手がその声量で夜中に歌いだした時は、さすがにすぐ上の住人が怒鳴り込んできた。そして逆にそうした友人たちの家に招かれると、クロードは必ず僕も連れて行った。

もちろん僕たちは若かったから、たまにはガールフレンドの一人も来ることがあった。それでもお互いのプライバシーは守られていたから、翌朝小さなキッチンで見知らぬ女性がコーヒーをいれていても、ただ「やあ。」と喋りやりすくすくだけだった。

こうしてクロードと僕の生活は始まっていった。

そして僕は失いかけていた心の拠り所を少しづつ取り戻していた。

□

数ヶ月があつという間に過ぎ、年も変わり季節は着実に春に向っていた。

その月、僕は金に窮していた。

わずかばかりの奨学金やバイトで食いつないではいたものの、思わぬ出費もあり懐具合は貧していた。

ある日クロードが仕事を終えて帰ってくると「何か、外に食べに行かないか？」と僕を誘った。金がなかったから断ると、「まあ、いいじゃないか。今日はオレがおごるから。」と言って、僕を連れ出した。かなり遅い時間だった。ほとんどの店は閉まっていた。二十分ほど歩くと一軒の小さなレストランがまだ開いていた。感じのよさそうなその店はこんな時間にも関わらず常連らしい客で混んでいた。

僕たちは店の主人が用意してくれた小さなテーブルに着いた。

注文を終えると、彼は仕事で疲れているにもかかわらず、冗談をまじえながらいつものように話し始めた。

僕は彼の話のほとんど聞いていなかった。僕は決心していた。今晚言おうと。そして今月どうしても家賃が払えないことをどのように言おうか、そのことばかりを考えていた。料理が運ばれてきてもそのことで頭がいっぱいになってなかなか喉を通らなかった。

「どうしたんだい？」

「いや。なんでもないよ。おいしいね。これ。」
「ああ。うまいなあ。ここはみっけもんだったな。」

僕はなかなか話を切り出せなかった。そうこうする内に食事は終わってしまい、彼は勘定を済ませ席を立った。

外に出ると昼間は少し暖かかったのに、冷気が頬をなでた。

その時、彼は僕の数歩先を歩きながら、振り向かずに黒い皮のジャンパーごしに僕に言った。

「なあ***。金ないんだろう。だから家賃は払えないよ。今月だけじゃなくしばらくはな。知っている通り、オレは決してリッチじゃない。けどアパート代ぐらい働いているから払えるしさ。だから心配するな。」

僕は何も言えなかった。そして自分が情けなかった。クロードだって大して金を持ってないのはよく知っている。働いているとはいえわずかな賃金であることも百も承知だった。

振り向いた彼に僕は少し頷くと、彼は僕に近寄って、肩に手をやりいつものようにメガネの奥の優しい目を細めながら微笑みかけた。

僕は涙が頬を伝うと、こげ茶のよれよれのコーデュロイのジャケットの袖でそれを拭った。

□

「しっ！ ぜったい音をだすなよ。静かに、静かに、そおっとだぞ。」そう言うと彼は鍵を鍵穴にゆっくりと、そして音が出ないように注意深く静かに差し込んだ。

その日は大統領選挙の日だった。

僕は投票に行くというクロードについていった。フランスの選挙の様子が見てみたかったからだ。

有権者は、候補者の名前が記された小さな紙片を何枚か受け取ると、その中から入れたい人物の名前の紙を選び投票箱に入れる。
僕は彼に頼んでその紙片を手に入れた。記念に日本にいつか持って帰るのだ。

投票が済み、僕たちは気持ちの良い春の終わりの風に誘われるままに歩いていた。

ある通りにさしかかると突然クロードはズボンの後ろのポケットから鍵束を取り出した。そして何本かある鍵の束の中から一本を外しとると、
「あったぞ。これだ。この鍵だ。」と言った。

「??」

「えへえ。この鍵だぞ。こいつはな、以前住んでいたアパートの鍵なんだ。そしてさあ、そのアパートってのがな、そこなんだよ。」と数件先の建物を指差しながら言った。

「ちょっと試してみるか。昔と変わってないな。このあたりも。懐かしいよ。ほんと。よし。決めた。ちょっとのぞいてみようぜ。」そう言うとそのアパートの中に入っていった。

僕はちょっと不安になりながらも彼の後について行った。建物の一階の入り口は開いていた。僕たちは階段で三階に上がった。ちょっといやな予感がした。

その部屋の前にくると、クロードは、

「ちょっと試してみるか。この鍵。」と言うと「ぜったいに声をだすなよ。中に誰かいるかもしれないしな。」と続けた。

「おい、やめようぜ、ちょっとやばいよ。昔住んでいたって言ったって、今はほかの人が住んでるわけだしさあ。それに鍵だってかわってるに決まってんじゃない。やめよう。やめよう。こんなところに見られたらやばいよ。」

「いや。試してみる。この鍵が使えるかどうか。決めた！」

そして不安がる僕のことなど意に介さないように、

「しっ！ ぜったいに音をだすなよ。静かに、静かに、そおっとだぞ。」と繰り返し、彼は鍵を鍵穴にゆっくりと、そして音が出ないように注意深く静かに差し込んだ。

僕はその場から立ち去りたかった。しかし彼は本気だった。

ゆっくり、そして静かに鍵を回した。

かちやりと音がした。僕にはその小さな音がまるで静寂を破る轟音のように聞こえた。

「開いた！」彼は「よしっ」とほとんど聞き取れないような小さな声で言うと扉の取っ手に手をかけた。

もう僕は我慢が出来なかった。住人が変わっても鍵が変わってないのも驚いたけれど、それよりもなによりも他人の家に忍び込むことに恐怖を覚えた。僕は彼の袖を引っ張りその場から離れることを促した。

しかしクロードは止めなかった。そしてドアを開けると暗がりの中に足音を消しながら入っていった。

「誰もいないぞ。」と言わんばかりに僕に手招きをした。僕はこのなりゆきに改めて恐怖をいだきながらしかたなく彼の後に続いて一步部屋に足を踏み入れた。

「誰もいないみたいだ。しかしまさかこの鍵使えるとはな。」そう言うのと、カーテンがいたままになって、外の街路灯の薄明かりが窓越しにもれるのを頼りに彼は部屋の奥に進

んでいった。

「おい。やめようぜ。もう出よう。なっ。」そう言って僕は表に出ようとした。すると彼は僕の袖をつかみ、

「大丈夫だって。誰もいないんだから。」と言い僕をおさえた。僕は怖かった。

”強制送還”の四文字が頭に浮かんだ。こんなところで空き巣容疑で捕まったらえらいことだった。

そんなことは気にも留めずクロードは僕の手を引きながらリビングに入っていった。

「う～ん。どうやら女だな、ここの住人は。きれいに片付いているしな。」

「.....」

「あっ、壁紙は昔と同じままだ。へえ懐かしいなここ。あっちがベッドルームで、バスルームはこっちだ。」とちょっとこんなときにニヤットしながら間取りの説明までしやがった。そしてリビングにある食器棚に手を伸ばし、

「これ、いいカップじゃないか。年代ものだぞ、これは。どこのかなあ、きっとリモージュあたりだぜこれは。」

「持ってくか。」と言わなかったことに少しホットはしたもののだんだん足が震えてきた。

彼は依然皿を見たり、家具をさわってみたり、興味津々といった顔で部屋の中をうろついている。その時突然外からパトカーのサイレンの音が遠くから聞こえてきた。

心臓が破裂しそうになった。もうだめだった。ぼくは音を立てないように気をつけながら部屋の外に出た。汗が噴き出していた。

するとちょっとの間をおき部屋の奥から大きな笑い声が聞こえた。クロードの声だった。僕はまたドキリとすると彼は腹をかかえながら部屋から出てきた。

「えへー。ここは、おれのママのうち、なんだ！ はっはっはっ。」

ハメられたのだった。「バカヤロウ。」
僕はその場所にへなへなど座り込んだ。

□

新しい大統領が決まった。

クロードはその瞬間、「ON A GAGNE !」と叫びながら表に出て行った。
外に出ると多くの若者が「ON A GAGNE!!」と同じように口々に叫んでいた。

僕はそれが”女がいねえ! ”、”女がカネ!”に聞こえてしまうのだった。

バスティーユに行くとき群衆が押し寄せていた。日本のテレビクルーが何社も取材に来ていた。
フランスは新たな時代を迎えようとしていた。

□

数年後、クロードはパリの南、メトロ MAIRIE D'ISSY の駅から程近いところに、友人のカップルと共同で小さな家を買った。彼はその二階に居を構えた。

あのモンパルナスの裏町の古いアパートは僕が出た後、外国から戻ってきたクロードの姉がしばらく住んでいた。

数ヶ月ぶりにパリに来ていた僕は仕事を終わると、すぐに彼の新居を訪ねた。

その時、僕は長居はできなかったけれど彼の新しい”住処”をみて嬉しかった。

そして帰国便の時間が迫ってきて急いで帰り支度をしている僕に彼は何かを囁くように言った。

「これはこの家の鍵だ。***がパリにきたらいつでも使ってくれ。そう、ここは***のパリの家なんだから。」そう言うと、ちょっと古めかしい真鍮でできた鍵を僕に渡した。

僕は彼をじっとみつめると大きくうなずいた。
そしてクロードは以前のようにメガネの奥の優しい目を細くしながら僕を抱きしめた。

その鍵はずっしりと重たかった。

□

クロードは、僕がパリの学生生活を終え帰国した後、”日本”の研究を本格的に始めた。

そして日本語の習得にはまず日本人の彼女をつくることだと考えた彼は、日本人が多い
そんなホテルニッコー・ド・パリの前で一人の女性をナンパした。
しかし彼の日本語は残念なことにまったく通じなかった。
あたりまえだった。彼が声をかけたのはタイの女性だったのだから。

そして、そのキュートな女性は彼の最愛の妻になった。

□

今クロードは日本の政府に招聘され国立大学で社会学の教授として教鞭をとり、学者として
日本にいる。もちろん愛する妻も一緒に。

僕はこのクロードによってパリで生かされた。

しかしその恩はまだ返していない。

追：

I S S Yの家はもうどうの昔に手放していて、あの鍵の本来の使い道はもうない。
しかしフランスに行く僕とは今もいつも一緒だ。

*フィクションです。登場人物等仮に似たものがあってもそれはすべて全くの偶
然にすぎません。